

Title	文化人類学の再生産：慶應義塾大学の場合
Sub Title	Reproduction of cultural anthropology : a case of Keio University
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.293- 310
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集文化人類学の現代的課題 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0296

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論 説

文化人類学の再生産

—慶應義塾大学の場合—

鈴木 正 崇*

**Reproduction of Cultural Anthropology:
A Case of Keio University**

SUZUKI Masataka

今回の特集「文化人類学の現代的課題」を組むにあたり、大学において確固たる位置付けのない文化人類学について、慶應義塾大学ではどのような形で教育や研究が行われてきたか、今後はどのような方向性を目指すべきかなどについて考察し、記録に留めることにした。現在のところ、日本では文化人類学を専門に養成する大学や研究機関は極めて限られており、将来的にも同じような状況が続くと見られるので、研究者や学生に参考資料として提示し、将来のあり方についても考えて頂くという意図がある。

1. 文化人類学の教育研究組織上の位置づけ

(1) 学部

文化人類学は学部においては、文学部の様々な専攻に分散して研究・教育を行っており、単独の専攻コースはない。研究者は、社会学、人間科学、民族学考古学、東洋史の4つの専攻と諸言語に分散しており、相互の連携は個別に行われている。主な研究者として、鈴木正崇・樫尾直樹（社会学）、宮坂敬造（人間科学）、吉原和男（東洋史）、野村伸一（朝鮮

* 慶應義塾大学文学部教授

語)がいる。棚橋訓(民族学考古学)は2001年4月に東京都立大学に転出した。

社会学専攻の場合は実質的には、社会学・社会心理学・文化人類学の3つに分かれ、社会学を基軸としながらも広い視野から人間を考える視野を養うことを目的とする。文化人類学の流れは、石津照璽のシャーマニズム研究や宮家準の宗教民俗学に始まり、吉田禎吾が客員教授について以後、社会人類学も取り込みつつ、宗教学や宗教民俗学から宗教人類学に至る分野を主体とする方向性が定まった。その確立は宮家準に負うところが大きい。

カリキュラムでは、2年において文化人類学概論が必修科目であり、社会学概論と社会心理学概論をあわせて履修して単位を取得しないと、3年に上がれないので、文化人類学が専攻の共通知識として取得される。文化人類学概論は、現在では、吉田禎吾を引き継いで鈴木正崇が担当している。選択科目では宗教社会学や比較文化論、家族親族論・知識社会学・都市社会学・教育社会学などと共に、社会学特殊や社会学特講として、文化人類学・宗教人類学・社会人類学・民族誌・地域研究・民族音楽・民俗芸能・民俗学などがとれるように工夫されている。人間科学でも非常勤で常に文化人類学関係の講師を招いている。

ゼミは3年と4年の2年間で、社会学では鈴木が文化人類学と民俗学、樫尾が宗教社会学を主として担当し、野村が朝鮮と中国を主体とするアジア研究である。卒論では文化人類学や民俗学だけでなく、社会学や宗教学、考現学に関係するものが多く書かれている。宮家は1999年に定年を迎えたが、担当ゼミの学部生の多くは文化人類学や民俗学の卒論を書き、大学院進学も多数を数える。大学院生には他大学からの入学者も多かった。

人間科学は1981年に社会学・心理学・教育学からスタッフを移動して独立した専攻で、荻野恒一による文化精神医学の講義が開設されて以来、

文化人類学を取り込むようになった。ゼミは宮坂が文化人類学、石井達朗が演劇学やジェンダー論を担当している。

一方、東洋史専攻には伝統的に文化人類学（民族学）や民俗学に関心を持つ者が多く集まった。その基礎を築いたのは松本信廣であり、パリに留学してマルセル・モースに師事すると共に東洋学を広く渉猟した。移川子之蔵や馬淵東一などの人類学者との交流もあり、比較神話学や東南アジア研究を基礎に、民族学・民俗学・考古学を関連付けた。柳田國男は松本との交流が深く、戦前には慶應で講義をしたこともある。松本の影響下から、伊藤清司の日中比較の神話学や少数民族研究、可児弘明による香港の蛋民や華僑の社会史、近森正のオセアニア文化史の研究が展開した。鈴木による中国少数民族の研究もこの影響の中にある。松本の業績や人間関係については、追悼論文集『稲・舟・祭』（六興出版、1982）に詳しい。1979年には、民族学考古学が西洋史・東洋史・日本史からスタッフを移動して専攻として独立し、近森はそこに移動した。民族学は当初は中村孚美、その後は棚橋訓が担当し、ソロモン諸島やクック諸島などがフィールドとなった。

国文学には民俗学の影響が強く、その主軸は國学院大学と兼担で慶應の教授となった折口信夫の芸能史や古代研究であり、池田弥三郎がその学統を堅持し、西村亨に受け継がれ、フィールドとして琉球に関心を寄せる者も輩出した。芸能史の講義は継続し、現在は野村伸一が担当している。慶應は國学院と並ぶ折口研究の二大中心地であったが、『折口信夫全集』（新版）の編集に井口樹生が参画して以後は、目立った業績は乏しい。折口信夫は井筒俊彦や西脇順三郎などにも大きな影響を与えた。また、写真家の芳賀日出男は中国文学の出身で、折口信夫に師事して国文学の研究者との交流があり、民俗写真の領域を開拓して民俗学の普及に貢献した。国文学を中心に地人会という研究会があり、池田弥三郎や西村亨を中心として運営され、民俗学や文化人類学に関心を持つ者が専攻や学部生、院生を問わ

ずに参加していたが、現在は中断している。最近では日本史で柳田利夫を中心にペルーの日系人など移民研究の動きもあらわれてきた。個別には英米文学の唐須教光の言語人類学、総合政策学部の奥出直人のアメリカ南部生活史研究、理工学部の小川葉子のイギリス移民研究などが進められている。

法学部では政治学科に社会学や地域研究の研究者がおり、ゼミではアメリカ研究、エスニシティ、民族問題、地域社会学が取り上げられている。関根政美はオーストラリアを中心とする地域研究、有末賢は都市民俗学や生活史を行っている。定年を迎えたが、十時巖周の都市人類学や有賀喜左衛門の農村社会学の学風が受け継がれていると言える。経済学部では社会史に関係するインドネシアの植民地研究の倉沢愛子、ラテン・アメリカの地域研究を進める清水透、日本の下層社会の生活史研究を進める中川清、イギリス社会史の松村高夫がいて、共同研究も行われている。

(2) 大学院

大学院の社会学研究科は1951年に創設され、当初から学部を越えて幅広い調査研究を進めることを目的とした。基盤となっているのは文学部・法学部・経済学部であるが、学生は内部の経済学部、商学部、法学部、文学部、環境情報学部、総合政策学部から受け入れ、他の大学からも広く学生が集まる。履修科目としては、修士課程は文化人類学演習・同学説演習・同特論・同学説特論、民俗学演習・同特論、歴史民俗学演習・同特論、社会史特論と同演習、博士課程では文化人類学特殊演習と同特殊研究、歴史民俗学特殊演習と同特殊研究、社会史特殊研究と同特殊演習がある。メディアコミュニケーション研究所、地域研究センター、言語文化研究所とも関わり、兼担している教員も多い。社会学だけでなく、政治学、文学、経済学などとの自由な交流の下に研究出来ることが特色である。

修士の入試は1次が語学と専門、2次が面接である。後期博士課程にも語学と専門と面接の入試があり、一貫性を強めることを含めて入試改革を

検討中である。国立大学の大学院拡充による影響で、修士課程の試験の志願者が減少し質が低下するなどの問題があり、後期博士課程に合格しても他大学、特に国立大学の大学院に流れるなどの変化が生じてきている。

博士号の取得については、後期博士課程の3年修了時に博士論文の研究計画書を出すことが義務付けられ、修了後3年以内に、博士論文を提出し学位を取得すること（課程博士）が目標になっている。計画書の提出条件は現在のところは規則化されていないが、論文を学会機関誌に少なくとも1本、他に紀要などの学術雑誌に1本、最低でも計2本の論文を出していることを条件として提出させる案が検討され、実施が確実視されている。もちろん、論文博士での審査は常に開かれており、課程博士の手続きに拘泥することはない。

平成13年(2001)度の文化人類学・民俗学関係の担当者は、宮家準、鈴木正崇、宮坂敬造、有末賢、関根政美、清水透、倉沢愛子、非常勤講師に大塚和夫、和崎春日、阿南透である。過去の担当者には松本信廣、中井信彦、櫻井徳太郎、鈴木孝夫、吉田禎吾、佐々木宏幹、末成道男、上田将、浜本満、真島一郎、白川琢磨、宮田登、藤井正雄、福田アジオ、松園万亀雄、波平恵美子、阿部年晴、小松和彦、中牧弘允、野本寛一、渡邊欣雄、渡辺公三、真野俊和、新谷尚紀、倉石忠彦、池上良正などがある。

当初は宗教学や宗教民俗学が主体であったが、次第に宗教人類学に展開した。有賀喜左衛門による家族・村落研究、中井信彦による社会史や柳田國男論も影響を与えた。この大学院の特色は、以上の成り立ちからもわかるように、文化人類学と民俗学を融合していることにある。研究地域はアジアが多く、朝鮮・中国・韓国・ベトナム・タイ・フィリピン、スリランカ・インド・バングラデシュ・ネパールなどであるが、アフリカでもカメルーン・ガーナ・コートディボワール・ケニア・ウガンダ、その他にミクロネシア、中南米のハイチ・ブラジル・ボリビア・グアテマラ・メキシコの研究者も輩出している。日本研究は民俗学だけでなく、文化人類学の手

法を取り込んでいる。民俗学や芸能史と接合して祭祀芸能の研究を行い、修験道を主体とする日本の民俗宗教の研究、海外の民俗宗教、特に東アジアや南アジアとの比較が試みられている。今後は新宗教研究にも展開すると思われる。民俗調査の成果としては、『修験集落八菅山』（愛川町、1978）、『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』（名著出版、1981）、『伝統的宗教の再生—解脱会の思想と行動—』（名著出版、1983）、『山の祭と芸能』上・下（平河出版社、1984）、『コスモスと社会—宗教人類学の諸相—』（慶應通信、1988）、『奄美伝統文化の変容過程』（国書刊行会、1989）、『宮古市史・民俗編』上・下（宮古市、1995）、『憑依と呪いのエスノグラフィー』（岩田書院、2001）などがあり、各地の市町村史の編纂に携わる中で調査方法をおぼえるというやり方もとっている。

修了後の進路としては、従来は多数の者が大学や研究機関で職を得ている。その状況は宮家準編『民俗宗教の地平』（春秋社、1999）で把握できる。但し、今後もこの傾向が続くかどうかは確証できない。主な就職先は、東京大学、東京外国語大学、東京都立大学、信州大学、埼玉大学、広島大学、名古屋大学、京都大学、徳島大学、弘前大学、長崎大学、国立歴史民俗博物館、四国学院大学、福岡大学、広島修道大学、専修大学、神奈川大学、日本女子大学、江戸川大学、敬和学園大学、常盤大学、大妻女子大学、杏林大学、共立女子大学、神奈川工科大学、日本橋学館大学、武蔵野美術大学、国士舘大学、東横学園短期大学、萩国際大学、鹿児島女子大学、小松短期大学などである。

大学院の文学研究科は主に東洋史、民族学考古学、国文学などの専攻から学生を受け入れ、外部からの受け入れも多い。文化人類学の専攻者の所属は史学専攻となる。現在の担当者として、吉原和男（東洋史特殊講義）、近森正（民族学考古学特殊講義）、坂本勉（東洋史特殊講義演習）がおり、国文学専攻に野村伸一（芸能史）がいる。平成13年度の非常勤講師は渡

邊欣雄と王建新である。過去には松本信廣、伊藤清司、可児弘明、岩田慶治、大林太良、石川栄吉、高橋統一、野口武徳などが担当した。奄美の民俗調査を実習として行ったこともある。社会学研究科と比べると、就職者は多いとは言えないが、鈴木は東洋史の博士課程終了後に、東京工業大学工学部助手を経て社会学専攻に入った。

社会学研究科と文学研究科との交流は、大学院生の間では、民族学・考古学、東洋史、日本史、国文学専攻との交渉がある。広く文化人類学に興味を持つ者の集まりとして、慶應義塾大学人類学研究会があり、研究会や講演会を適宜行っている。

(3) 研究所

文化人類学に関わる研究所としては、学部を越えた共同利用研究の拠点として、1984年4月に設立された地域研究センターがあり、これまでに国際シンポジウムや公開講演会、ワークショップや地域研究講座を主催してきた。主な成果としては、近森正『クック諸島の研究—人間と先史社会—』（慶應通信、1991）、可児弘明編『香港および香港問題の研究』（東方書店、1991）、可児弘明編『華南—華人・華僑の故郷—』（慶應通信、1992、『僑郷 華南—華僑・華人研究の現在—』行路社、1996として再刊）、地域研究センター編『民族・宗教・国家』（慶應通信、1994）、宮家準・鈴木正崇編『東アジアのシャーマニズムと民俗』（勁草書房、1994）、柳田利夫編『アメリカの日系人』（同文館、1995）、金子量重・坂田貞二・鈴木正崇編『ラーマ—ヤナの宇宙—伝承と民族造形—』（春秋社、1998）、可児弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編『民族で読む中国』（朝日新聞社、1998）、鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究—日本と韓国—』（第一書房、1999）、吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『〈血縁〉の再構築—東アジアにおける父系出自と同姓結合—』（風響社、2000）、山本英史編『伝統中国の地域像』（慶應義塾大学出版会、2000）、The Chinese Expansion and the World Today 1996, Center for Area

Studies などがある。定期的に発行している CAS ニュースレターにも研究会の報告、各地の調査報告、文献紹介が掲載されている。

言語文化研究所は専任者がおり、言語と歴史の研究が主体であるが、比較的マイナーな言語の教育にも力を入れている。講座としては、古典語としてギリシャ語とラテン語、アラビア語・トルコ語・ペルシャ語などイスラーム圏の言語、タイ語・カンボジア語・ベトナム語・インドネシア語などの東南アジアの諸言語、最近ではヘブライ語の講義も開設された。井筒俊彦や前嶋信次などのイスラーム研究と松本信廣のインドシナ研究を母体とし、アラビアの宗教や言語の研究の黒田壽郎や牧野信也、ベトナムや中国の歴史研究の川本邦衛や竹田龍児、言語社会学の鈴木孝夫、インド洋・アラビア海の海洋貿易研究の家島彦一などの研究者を輩出し、現在では嶋尾稔がベトナムの近代史研究や現地調査を行っている。言語の研究が中心であるが地域研究の様相もある。

斯道文庫は国文学や書誌学の研究所であるが、かつては松本隆信がいて中世の本地物や御伽草子の研究が盛んに行われ、所蔵史料も豊富で神仏習合や民俗社会のあり方を知る上で欠かせない。寺社縁起の古いものなども所蔵している。小松和彦もここで中世の知識を仕入れて文化人類学的に絵巻物を読み説く方法を身につけた。大沼晴暉は近世の専門だが、常民文化研究所や民俗学者の神野善治と交流があり、民間医療、旅日記、民間信仰などに関わる江戸時代の庶民史料を読みこなして、歴史学と民俗学を結合させる試みを行っている。

2. 学生はなぜ、なにを期待して人類学を学ぶか、どのように学ぶか、 学んでどうするか？

学部では、文化人類学の学説の研究や民族誌の読み込みや作成などよりも、現実に行っている身近な事例を研究する傾向があり、考現学や風俗学の領域に及ぶことが多い。学部において繰り返し取り上げられる主題と

しては、民族問題、脳死・臓器移植、ホスピス、外国人労働者、在日韓国朝鮮人などがある。文化人類学や日本民俗学を専門に研究するというよりも、指導教授の個性に合わせてゼミを選択し、かなり自由に主題を選ぶ傾向がある。就職は様々で、特に文化人類学との強い繋がりがあるわけではない。

大学院の修士課程では自分の目標が何かを明確に判断している者はさほど多くない。調査をすることで目覚めるか、専門論文をかなり読んだ時点で気づくことが多い。学部の専攻が様々なので、文化人類学の基礎的な文献に眼をとおしていない。古典よりは現代のもてはやされているものを追いかけて、結局は何をしたらよいのかわからなくなる。修士論文にはフィールドワークを踏まえた事例研究が多いが、2年間ではやや無理かと思われる傾向がある。後期博士課程の入試に語学・専門があることが微妙に影響している。今後は入試改革を目指し、修士論文の評価を取り入れる方向へ改善する時期に来ているであろう。

後期博士課程では、研究主題は文化人類学や民俗学に限定され、宗教にからむものが大半を占めるようになる。国立大学の大学院博士課程への流出傾向があり、一橋大学には既に4人ほど流出した。その理由はフィールドの違いや将来の就職可能性の高さを求めてである。研究者として大学などへの就職を希望する者が多いが、質の高い現地調査をどれだけ行ったかによるといっても過言ではない。

慶應義塾大学大学院社会学研究科の研究と教育について、以下の点を評価として指摘することが出来る。

長所

1. 学部との接合がゆるいので、系統の異なる学問を学んだ者が相互に刺激を与えあえる。
2. 学部段階で人類学以外の学問の訓練を受けることで、理論や方法

論を使って調査資料をまとめあげる能力を養え、収集した大量の調査資料に方向性を与えうる。

3. 総合大学のよさとして、経済学・法学・政治学・歴史学・教育学・心理学・哲学・倫理学・文学など、異なる分野の専門家に相談することが容易である。
4. 研究所の共同利用やプロジェクトの活用によって視野を広げられる。
5. シンポジウム、講演会、研究会が数多く開催されるので刺激がある。
6. 先輩後輩の協力関係を生かしたフィールドワークが行える。継続して同じ地域を調査する伝統があった。これによって次第に共同調査から単独へ移行する契機を作れる。

問題点

1. 文化人類学の基礎文献を読みこなしていないので、共通基盤が確立されない。
2. 多様な専門教育を受けた者が寄り集まるので研究方法や目的が拡散する傾向がある。
3. 人類学の多様性にとまどい、どこに自己の基盤をおくのか迷うことがある。これには現代社会において人類学的な研究課題を設定することの難しさもからんでくる。パイオニアワークの不在が問題である。
4. 理論化の訓練や方法論の活用が不十分な場合があり、記述に留まる傾向が見られる。
5. 個々のフィールドワークの徹底化が不十分である。これは調査を教える手作りの作業が消えたことにも原因があるのかもしれない。
6. 調査資金の捻出にどのように対応するか。恒常的資金不足の問題がある。特に日本の国内でのフィールドワークに関わる。

7. 文献だけで論文を書く状況が生まれてきており、その長所短所の見分けが難しい。

今後の課題

1. 大学の個性や培ってきた伝統を生かすことが大事と考える。人類学と民俗学の接合、地域研究の蓄積、宗教人類学への特化、長期プロジェクトの活用などが望まれる。
2. 調査に奥行きを与えるために文献を活用したり、歴史を取り込むためのノウハウの蓄積が必要かもしれない。史料の読み込みなどは未だ不十分である。
3. 古典的な基礎教養として、文献を広く深く渉猟することが少ない。幅広い教養をフィールドワークという人生体験に結びつける可能性を広げる。
4. 自己の調査地や地域を持ち、徹底した調査を継続的に行い、良質でオリジナル・データを集めることに意欲に燃やす研究者が少なくなっている。
5. 人間関係のネットワークと情報収集能力の構築に関わることが大きい。努力と個性の問題でもある。

3. 修士論文・博士論文一覧

鈴木が担当するようになった1986年以降の修士論文と博士論文の一覧を掲げておく。修士論文は文化人類学、社会人類学、民俗学、宗教学に関するものが大半で、博士論文は宗教人類学か宗教民俗学に限定される。この内容から慶應義塾大学における文化人類学の再生産がどのように行われてきたかを知ることが出来る。

修士論文（社会学研究科）

2000 年度

- 宮坂 清 『北インド，ラダック地方のチベット系社会の医療人類学的考察—巫者ラバ・ラモを事例として—』
- 泉 暁 『生活意識からみる「親族」関係—鹿児島県大島郡徳之島町井之川の事例より—』
- 輿水 辰春 『「民俗芸能」に関する知識の—考察—山梨県南都留郡秋山村無生野大念仏を事例として—』
- 高岡 文章 『大衆観光 (mass tourism) の歴史的展開とその両面評価』

1999 年度

- 石井香世子 『タイにおける山地民概念の変遷と山地民—チェンマイ市内リス族の事例から—』

1998 年度

- 迫田恵美子 『「ヒーリングブーム」の受容と変遷—現代女性のヘルスケア実践と身体化—』
- 市田 雅崇 『神格に刻まれた歴史—気多神社・平国祭を通じて—』
- 織田 竜也 『祭りの経済人類学的考察—諏訪大社上社御柱祭の事例から—』
- 門傳 仁志 『見世物と現代社会』

1997 年度

- 谷部 真吾 『祭りに見られる対立と意味—遠州森の祭りの事例から』
- 細川 隆憲 『アルフレッド・シュッツの他者理解についての—考察—「問題」的状況をめぐって—』
- 田熊 啓 『祭祀集団における言説と動態—巖島神社管絃祭の事例を通じて—』

1996 年度

鈴木 晴子 『新宗教教団の聖地と神話—神道天行居を事例として—』

1995 年度

本谷 裕子 『中米インディヘナ村落における聖人信仰と村意識の変遷—グアテマラ・ソロラ県ナウアラ村の事例より—』

高須 久樹 『民俗知識にみる自然と生活—埼玉県宮代町の事例を中心に—』

中野麻衣子 『バリ島の村落社会における芸能活動のカテゴリー分析—Adat と Bisnis を中心に—』

尾崎 彩子 『洗骨から火葬への移行にみられる死生観—沖縄県国頭郡大宜味村喜如嘉の事例より—』

古賀万由里 『南インドにおける巡礼と女性—ケーララ州サバリマラを中心として—』

中山 和久 『南関東の不動信仰—関東三十六不動霊場を中心として—』

濱千代早由美 『祭りの変化に見る地域社会の再編—三重県度会郡二見町江・茶屋区の事例を中心に—』

1994 年度

尾形 秀夫 『近代におけるアイヌ民族の研究—特に明治期共有財産の確立について—』

久保田滋子 『チベット難民のアイデンティティ形成』

浅野さわ子 『景観に刻まれた社会組織—神奈川県藤沢市遠藤の空間構成—』

梅屋 潔 『新潟県佐渡島における呪詛—黒森・白田地区の事例から—』

田中 正隆 『祭祀形態の持続と変化に関する—考察—トカラ列島・悪石島の事例を通して—』

文化人類学の再生産—慶應義塾大学の場合—

中野 紀和 『都市祭礼から見た地域社会の変化—小倉祇園太鼓を事例として—』

平川 智章 『職位分析に基づく政治体系のモデル化—ナイル系シルック (Shilluk) の歴史資料を中心に—』

1993 年度

落合 睦臣 『新宗教研究の視角から見たチャネリング—バシャールを事例として—』

猿渡 土貴 『国東半島・岩戸寺の修正鬼会における「伝統」と変化—祭祀集団の変遷を中心に—』

宮下 克也 『現代沖縄における土族門中—金武御殿巡拝を通して—』

山田 慎也 『葬制の変化に関する—考察—和歌山県東牟婁郡古座町の事例を通して—』

1992 年度

禅野 美帆 『メキシコ・インディオ社会における村落—都市関係の変動過程—サン・マルティンの事例から—』

小牧 幸代 『インドのムスリム社会における聖者信仰—ニザームディーン廟を中心に—』

假屋雄一郎 『神社・小祠祭祀と修験道—岩手県宮古市牛伏の場合—』

関口 里華 『在日外国人の異文化適応教育の考察—異文化コミュニケーションギャップとその対応—』

武者根里子 『ニュージーランド・マオリの集団形成とアイデンティティの原理』

1991 年度

仲川 裕里 『House Society—〈イエ〉社会研究の試論—』

新井 高子 『観光と社会変化—岩手県宮古市を中心に—』

佐藤 桂子 『葬送儀礼にみる親族—岩手県宮古市岩船を中心に—』

塩月 亮子 『沖縄・備瀬における災因論—ユタとの関係を通して—』

庄司 一郎 『インドにおける芸能集団ヒジュラをめぐる言説と社会
表象に関する考察』

杉村 貴代 『モロッコにおける聖者崇拜』

1990年度

萩原 真由 『ハワイにおける「レイ」のシンボリズム』

七尾由紀子 『山村における民俗の変容—岩手県宮古市長沢川目地区
の場合—』

小椋 美穂 『門中論再考—北部沖縄における「門中」理念について
の一考察—』

高橋 由加 『漁村における社会結合の指標としての氏神—岩手県宮
古市重茂北区地域の場合—』

外川 昌彦 『カルカッタのドゥルガ・プジャー—ベンガル民俗誌序説』

1989年度

長倉 養輔 『沖縄本島北部における村落共同体の相互関係—ウン
ジャミ祭を通して見た—』

1988年度

中西 裕二 『ミクロネシア・ヤップ島の二元論』

室橋 弥生 『お産考—通過儀礼としての妊娠・出産—』

鈴木 裕之 『現代アフリカ都市におけるエスニック・ダイナミズム
—ザイール・キンシャサの事例を中心として—』

高橋 晋一 『台湾の王爺信仰—その象徴論的考察—』

1987年度

石橋 邦也 『北部沖縄、一島嶼における「門中」と「家」—』

伊東 早苗 『大峯山の女人禁制—洞川側登り口を中心に—』

修士論文（文学研究科）

2000年度

- 伊藤ゆかり 『古代のタマ観念と儀礼について—葬送・農耕儀礼におけるアニミズムの理論と鎮魂の信仰—』（国文）
- 原 淳一郎 『近世南関東における社寺参詣—庶民旅行の興隆と実態—』（国文）

1998年度

- 島田 倫子 『近世浅草寺境内における芸能興行』（日本史）

1997年度

- 池和田有紀 『中世前期の御神楽と儀礼空間』（日本史）
- 岩間 一弘 『民国期上海紳商による誘拐防止事業—中国救済婦孺会資料を通して—』（東洋史）
- 鯛 史子 『瀬戸内海における沿岸漁労の研究—蛸壺漁の発達を中心として—』（民族考古）
- 飯島 奈海 『関東浄土宗と血盆経信仰—『孟蘭盆私記疏』を中心に—』（国文）
- 河野亜里奈 『折口信夫の学の創造—「神」を求めて—』（国文）

1996年度

- 神田 修 『道祖神信仰の諸相とその展開』（国文）

1995年度

- 三浦 直彦 『ポリネシアの先住民伝承—土地と物語の風土論的考察—』（民族考古）
- 原 奈緒 『富士講の発展と衰退』（民族考古）

1994年度

- 高木英理子 『芸能の範疇について—祝詞の音楽的要素の研究—』（国文）
- 藪崎 聖子 『扇の所作とその芸能』（国文）

1992年度

- 赤木 妙子 『布哇出稼移民の郷里への書簡を通してみた移民集団の諸階層』(日本史)
- 日朝 秀宜 『都市の近代化と忌避施設—19世紀末東京の墓地と火葬場—』(日本史)
- 大熊 享 『村落の空間と歴史—沖縄県宮古郡上野村・野原の場合—』(民族考古)

1990年度

- 樋口 麗子 『近代における日中家族制度考』(日本史)

博士論文(社会学研究科)

- 山田 慎也 『現代日本における葬儀と死生観の変容に関する民俗学的研究』2000
- 外川 昌彦 『インド・ベンガル地方の女神信仰と村落社会』2000
- 坂本 邦彦 『東アフリカ農耕民社会に関する社会人類学的研究』1999
- 神田より子 『巫女と修験の歴史的変遷に関する民俗学的研究』1999
- 由谷 裕哉 『地方修験の宗教民俗学的研究』1999
- 新谷 尚紀 『死・葬送・墓制をめぐる民俗学的研究』1997
- 和崎 春日 『左大文字の都市人類学的研究』1993

博士論文(文学研究科)

- 野村 伸一 『祭祀芸能の対照研究—灘の視点から—』1999
- 鈴木 正崇 『スリランカの宗教と文化に関する人類学的研究—シンハラ人を中心として—』1994
- 伊藤 清司 『東アジア民間説話の比較研究』1990

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)による「日本における文化人類学教育の再検討：新たな社会的ニーズのなかで」（研究代表者：山下晋司）の成果の一部である。